

「雁」にこめられた秘密

前田淳

- (1) はじめに
- (2) 岡田紹介の文章
- (3) 川上眉山への言及
- (4) 物語「雁」の成立とその内容
- (5) 「お玉」という名前
- (6) 終わりに

- (1) はじめに

極めて高い社会的地位にあった鷗外森林太郎が、どのような理由から裏店に住む飴屋の老人とその娘の人生にそれを「雁」という一篇の物語に仕立てる程の深い興味を持ったのか。恐らくそこに物語執筆の動機が潜むあのお玉にもつ作者の愛着は何に発しているのか。本稿はこのような疑問に答えようとするものである。

本稿の論述の次第は次の通りである。先ず論の手掛かりを主人公岡田を紹介する冒頭の文章に求め、この紹介文が挙げる岡田の特徴が後に描き出される岡田の行動とよく照応することに注目する。中でも川上眉山に言及する鷗外の意図を本稿は重く見る。次に「雁」の語り手「僕」がお玉から「岡田が去った後に、凶らずもお玉と相識になって聞いた」物語の箇所を吟味し、その内容から「僕にお玉の情人になる要約が備わっていぬことは論を須たぬ」とわざわざ断りをつける「僕」とお玉との関係を推測する。方向を転じて「玉」という名前が鷗外の作品に持つ意味を考える。ここで(注1)六草いちか氏「鷗外の恋 舞姫エリスの真実」の発見を借りて論を進め、結論に至る。現在もよく読まれるこの物語を始めとして、鷗外の文章に親しんでいる読者には既知に属することを書く場合も多いが、論述の都合上やむを得ぬこととして了解していただければ幸いである。

- (2) 岡田紹介の文章

「雁」冒頭で岡田は次のように紹介される。

この男は岡田と云う学生で、僕より一学年若いのだから、とにかくもう卒業に手が届いていた。岡田がどんな男だと云うことを説明するには、その手近な、際立った性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云うことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、体格ががっしりしていた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強いて求めれば、

大分あの頃から後になって、僕は青年時代の川上眉山と心安くなった。あのとうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似ていた。尤も当時競漕の選手になっていた岡田は、体格でははるかに川上なんぞに優っていたのである。容貌はその持主を何人にも推薦する。しかしそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云うと、僕は当時岡田程均衡を保った書生生活をしている男は少かろうと思っていた。学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は極って遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、そうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでいるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問いに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠って匡されるのである。(略) 岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云えば、文学趣味があるからであった。

(壱)

この箇所を取り上げられる岡田の特徴を順々に挙げると次の通りである。

第一の特徴 美男子である

第二の特徴 運動家である

第三の特徴 特待生を狙う勉強家ではない(しかし成績は常に級の中位以上である)

第四の特徴 時間を几帳面に守る

第五の特徴 文学趣味がある

物語はこれから岡田の日常を語ってゆく。その叙述のあり方について一言するならば、細部をも書き洩らさぬ念の入った描写がこの小説の一特徴といえるであろう。湯屋から帰ったお玉の描写に見られるような些細なことをも書き漏らすまいとするその書き方の背後には、そもそも人生においては大小を問わぬ人の行為とその結果が堆積し時満ちてある結論に至るものだと言わんとする作者の姿を感じる。瑣々たる日常の出来事に人生を觀ずるとでもいうべき姿勢で、日々生起するこまごまとした事柄を叙述して作り上げた「雁」という物語への興味、延いてはそのようにして一篇の物語を書いた作者への関心も強まる。それらの事件は、あの「青魚の味噌煮」のように特にそれと指摘されなければ、日常の平凡な出来事の一つとして我々の注意を惹かぬままに記憶の底に沈んでしまうもの、消えてしまうものが殆どである。しかし、これから説明するように、それら一見区々たる日常の出来事も、物語「雁」を進行させる上での契機となっている。つまりこれは単に瑣事を写し取るために瑣事を写し取るのではなく、その瑣事こそが人生を形づくるのだという思いが裏にある故になされたことなのではないか。この物語の推移は自然だが、注意深い目を以って見ようとする者には、描かれた人生の瑣末事の流れの中に、事の成り行きが明らかに見えるといえるように思える。そこで描き出される瑣事の背後にひそむ意味も考えてみたくなる。その意味で「雁」は我々が人生を振り返り人間社会を

観察する時に持つのと同趣の興味を起こさせる物語である。この物語の至る所に(注2)人間観察の面白さ、人生観照の妙味を味わうことができるように筆者は思っている。

この章では、先の岡田の特徴が物語の進行の中でどの様な出来事と関係しているのか、岡田の特徴とそれに照応する事件を取り上げて説明を加えてゆきたい。

さて、第一の特徴は「美男子である」である。

岡田がどんな男だと云うことを説明するには、その手近な、際立った性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云うことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、体格ががっしりしていた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強いて求めれば、大分あの頃から後になって、僕は青年時代の川上眉山と心安くなった。あのとうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似ていた。尤も当時競漕の選手になっていた岡田は、体格でははるかに川上なんぞに優っていたのである。(巻)

ここでは語り手「僕」の観察としてこの特徴が明らかにされている。それは「運動会系のたくましい肉体を持つ美男」であり、それが「際立った性質」される。しかし、この段階では岡田のこの特徴は、まだ「僕」一人の観察であって、物語の展開とも絡み合っていない。後に「お玉のためには岡田も只窓の外を通る学生の一人に過ぎない。しかし際立って立派な紅顔の美少年でありながら」(拾陸)と、お玉の印象として繰り返されて、岡田のこの第一の特徴がお玉に働き掛けたことを指摘し、それが物語の展開に重い役割を担っていることが明らかにされる。「岡田がどんな男だと云うことを説明するには」云々に始まる文章は、はなはだ通俗的な見方である「容貌はその持ち主を何人にも推薦する」の変奏とも言えるが、この岡田の紹介文はお玉の発見(「しかし際立って立派な紅顔の美少年でありながら」と伏線的に応じ合う。お玉が岡田に注意を向け始めるきっかけとなったのがこの特徴であったという事実の重要度は決して小さくない。岡田を紹介する冒頭の文が後にその特徴と関係する事実、即ち「お玉の注意を惹く」という事実によって役割を与えられ、物語の中に確かな位置を占めるようになる。これを照応の第一の例として指摘したい。しかし、この第一の特徴がこれ以上物語の内部に食い込まない所には(注3)作者鷗外の面白い見方があるように思われるので、相応の注意を向けておくべきかも知れない。

第二の特徴は「運動家である」である。岡田は「血色が好くて、体格ががっしりしていた」とか、「尤も当時競漕の選手になっていた岡田」とかと紹介されている。「競漕の選手」といえば、相当の腕力があることを暗示するが、これも後に出る幾つかの箇所と照応する岡田の肉体的な特徴である。先ず指摘しておきたいのがあの蛇退治の場面である。

岡田は待ち兼ねたようにそれを受け取って、穿いていた下駄を脱ぎ棄てて、脇掛窓へ片足を掛

けた。体操は彼の長技である。左の手はもう庇の腕木を握っている。(拾玖)

これがお玉と岡田との距離を急速に縮める機縁となった事、またこの事件と関係付けてお玉が岡田に近づこうと企てたこと、その企てが最後の場面で覆されたことなど、この場面は物語に急展開をもたらす結末を導く重要な場面である。そのような事件に関連して記される「体操は彼の長技である」という一行、即ち「岡田は運動家である」という事実をいう一行は、決して軽く見ることができない。この「運動家」という特徴の重みは、「岡田が体操を得意とする運動家の学生でなく、この場面で際立った働きができなかったとしたら、その後物語はどう展開したか」と考えてみると十分説得力がある。冒頭で示されるこの特徴がこうした重要な場面と照応することは見逃してはならない。

更に、物語の最終場面、あの不忍池の場面でもこの「運動家」という特徴は効果的に働いている。

「あれまで石が届くか」と、石原が岡田の顔を見て云った。

「届くことは届くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答えた。

「遣って見給え」

岡田は躊躇した。「あれはもう寝るのだろう。石を投げ付けるのは可哀そうだ」

石原は笑った。「そう物の哀を知り過ぎては困るなあ。君が投げんと云うなら、僕が投げる」

岡田は不精らしく石を拾った。「そんなら僕が逃がして遣る」つづてはひゅうと云う微かな響をさせて飛んだ。僕がその行方をじっと見ていると、一羽の雁が擡げていた頸をぐたりと垂れた。それと同時に二三羽の雁が鳴きつつ羽たたきをして、水面を滑って散った。しかし飛び起ちはしなかった。頸を垂れた雁は動かずに故の所にいる。(貳拾貳)

野生の鳥は人がはるか遠くにいてもその気配を察知してそわそわと飛び立つ。野鳥は決して人に近寄り過ぎないものである。これは少しでも野鳥を観察した経験のある人なら思い当たる事実ではないだろうか。「雁」に描かれる不忍池の雁はもちろん人に馴れぬ野生の雁である。そして「その葦の枯葉が池の中心に向かって次第に疎になって」いる岸からはやや離れた処に降りて羽を休めていたのだろう。「あれまで石が届くか」という石原の言葉は、この石原の言葉のすぐ後に石に中って死ぬ雁と今岡田が立つ不忍池の岸の一地点との間に相当の距離が存在したことを思わせる問いかけである。この問いかけに「届くことは届く」と岡田は応じている。「運動家である」という特徴、しかもそれが腕を鍛錬する競漕という種目の運動家であるという特徴が効果的に読者の心に働いているから、岡田のこの応答は不自然に響かない。岡田がもし「色の蒼い、ひよろひよろした美男」であったなら、石原との会話とその後の結末は極めて不自然に見えたことだろう。この場面でも冒頭の岡田紹介文との照応が見られるといわなければならない。しかも単に両者が照応しているというだけではない。岡田が投げた石に中って死ぬ雁が物語に占める意味を考えると、ここでのこの「運動家である」という岡田の特徴もまた極めて重い意味を持つと言わなければならない。

第三の特徴は「特待生を狙う勉強家ではない」である。蛇足を加えると、この「勉強」は今いう「勉学」の意の勉強ではなく、もっと広い意味での「努力」を意味する。鷗外はこの言葉を「半日」で「奥さんは嫌な事はなさらぬ。いかなる場合にもなさらぬ。何事をも努めて、勉強してするという事はない。」と使っている。ここでの「勉強」が「勉学」の意でないことは明らかで、「消極的な気持ちを抑えて意志の力で気のすすまぬことに取り組むこと」という意味に解される。「勉強（家）」の意味については、「当流比較言語学」に次のような鷗外自身の詳細な説明がある。

手近い処で言ってみると、独逸語に Streber という詞がある。動詞の streben は素と体で無理な運動をするような心持の語であったそうだ。それからもがくような心持の語になった。今では総て抗抵を排して前進する義になっている。努力するのである。勉強するのである。随て Streber は努力家である。勉強家である。抗抵を排して前進する。努力する。勉強する。こんな結構な事は無い。努力せよという漢語も、勉強し給えという俗語も、学問や何か、総て善い事を人に勧めるときに用いられるのである。勉強家という詞は、学校では生徒を褒めるとき、お役所では官吏を褒めるときに用いられるのである。（下線前田）

ところで、この語に関して、同じ文章に鷗外は次のようなことも書いている。これは「特待生を狙う勉強家」を鷗外がどのように見ていたかをうかがわせる文章である。

然るに独逸語の Streber には嘲る意を帯びている。生徒は学科に骨を折っていれば、ひとりでに一級の上位に居るやうになる。試験に高点を贏ち得る。早く卒業する。併し一級の上位にしよう、試験に高点を貰おう、早く卒業しようと心掛ける、其心掛が主になることがある。そういう生徒は教師の心を射るようになる。教師に迎合するようになる。陸進をしたがる官吏も同じ事である。其外学者としては頻りに論文を書く。芸術家としては頻りに製作を出す。えらいのもえらくないのもある。Talent の有るのも無いのもある。学問界、芸術界に地位を得ようと思つて骨を折るのである。独逸人はこんな人物を Streber というのである。

Moritz Heyne の字書を開けて見ると、Bismarck の手紙が引いてある。某は中尉で白髪になっているのだから、Streber であるのも是非が無いというような文句である。此例も明白に嘲る意を帯びている。

僕は書生をしている間に、多くの Streber を仲間を持っていたことがある。自分が教師になってからも、預かっている生徒の中に Streber のいたのを知っている。官立学校の特待生で幅を利かしている人の中には、沢山そういうのがある。（下線前田）

これから岡田の「特待生を狙う勉強家ではない」には語り手「僕」、ひいては作者鷗外の人生の知見を通して身に付けた好感が込められていたことが分かる。反対に「特待生を狙う勉強家」を鷗外が軽蔑していたこともまた説明するまでもない。しかもその軽蔑、嫌悪が根深いものであったことは作品の中に次のような会話を書く所からも容易に推測できる。

古賀はにやりにやりに笑って僕のする事を見ていたが、貞丈雑記を机の下に忍ばせるのを見て、こう云った。

「それは何の本だ」

「貞丈雑記だ」

「何が書いてある」

「この辺には装束の事が書いてある」

「そんな物を読んで何にする」

「何にもするのではない」

「それではつまらんじゃないか」

「そんなら、僕なんぞがこんな学校に這入って学問をするのもつまらんじゃないか。官員になる為めとか、教師になる為めとかいうわけでもあるまい」

「君は卒業しても、官員や教師にはならんのかい」

「そりゃあ、なるかも知れない。しかしそれになる為めに学問をするのではない」

「それでは物を知る為めに学問をする、つまり学問をする為めに学問をするというのだな」

「うむ。まあ、そうだ」(「キタ・セクスアリス」)

また「学問をする為めに学問をする」という学問をする者の理想の姿が鷗外の心裡に存在したことを思いながら読むと、「しかし抽斎は心を潜めて古代の医書を読むことが好で、技を売ろうという念がないから、知行より外の収入は殆どなかっただろう」という「澁江抽齋」の文言も、鷗外の抽齋に寄せる「敬慕」「畏敬」「親愛」を読者に伝える。これとは反対なのが「学問芸術で言えば、こんな人物は学問芸術の為に学問芸術をするのでない。学問芸術を手段にしている」(「当流比較言語学」)とか「特待生を狙う勉強家」とかと観察される者への軽蔑、嫌悪である。あの「学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない」という「僕」は作者鷗外と重なるが、この岡田紹介の数行は「僕」が岡田に好感をもつことを自ずから明かしている言葉である。更に云えば、これは語り手「僕」が岡田を強くわが身に引き当てて発した評言でもあり、ここから「僕」自身もまた「学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではな」かったといっても見当はずれな推測ではない。ここに、岡田と「僕」との親近、物語での人物造形上での重なりが指摘できる。「自分を岡田の地位におきたい」(「式拾式」)というのも、こういった重なりがあつてのことなのではないか。

この第三の特徴に照応する物語の箇所はどこか。

蕎麦を食いつつ岡田は云った。「切角今まで遣って来て、卒業しないのは残念だが、所詮官費留学生になれない僕がこの機会を失すると、ヨオロッパが見られないからね」(式拾参)

「卒業しないのは残念だ」、「所詮官費留学生になれない僕」と心情を吐露する岡田の言葉からも明らかなように、これは「学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た」という語り手「僕」が好

感をもって認める第三の特徴が岡田の将来に左祖しなかった例である。(注4) 三好行雄氏は「官費留学生」の注に「政府が国費で学術・技芸の研修のため海外に派遣する留学生。大学の成績優秀なものが選ばれた」としている。「級の中位より下には下らず」とあるから岡田は劣等生では勿論なかったが、決して「成績優秀なもの」というわけではなかったようである。岡田の成績について言及した冒頭の岡田紹介の文に照応する箇所として物語が殆ど終わろうとする結末のこの場面を指摘したい。冒頭の岡田紹介の文言が後に出る事実で裏付けられる第三の例であるが、これがお玉の密かな企てを完全に打ち砕くことにつながることを考えると、この第三の特徴が物語に果たす役割は非常に大きいと見なければならない。

さて、次は第四の特徴「時間を几帳面に守る」である。

遊ぶ時間は極って遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、そうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでいるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問いに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠って匡されるのである。(壱) (下線前田)

このような岡田の規則的な行動からお玉は自分の家の前を岡田が何時ごろ通るか、その見当を付けることができた。小説には次のような描写がある。

そして丁度真ん前に来た時に、意外にも万年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されていた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでいるのである。

それからは岡田が散歩に出て、この家の前を通る度に、女の顔を見ぬことは殆ど無い。(中略) 女は自分の通るのを待っているのだろうか、それともなんの意味もなく外を見ているので、偶然自分と顔を合せることになるのだろうかとか云う疑問が起る。(中略) そうして見ると、あの女は近頃外に気を付けて、窓を開けて自分の通るのを待っていることになったらしいと、岡田はどう判断した。(弐) (下線前田)

岡田の判断したようにお玉は岡田が自分の家の前を通る大体の時刻を知って岡田を待っていたのである。

その又次の日は、いつも岡田の通る時刻になると、お玉は草帚を持ち出して、格別五味も無い格子戸の内を丁寧に掃除して、自分の穿いている雪踏の外、只一足しか出して無い駒下駄を、右に置いたり、左に置いたりしていた。(弐拾) (下線前田)

こうして岡田とお玉の距離は次第に縮まってゆく。小説の描写は次の通りである。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思っているうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなって、二週間も立った頃であったか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。その時微白い女の顔がさっと赤く染まって、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になった。それからは岡田は極まって窓の女に礼をして通る。(式)

このように岡田の行動の規則正しさが岡田とお玉の距離を縮めるのに重要な働きがあったことは言うまでもない。ここに第四の特徴と物語のこの場面との照応が指摘できる。勿論それはこの出会いの場面だけに終わるのではない。岡田の行動の几帳面さが、物語の中で果たす決定的な意味は話の最後にこそ用意されている。岡田は「夕食後に必ず散歩に出」(壺)るとある。それがまた物語の最終場面でも次のように活動している。

僕は釘に掛けてあった帽を取って被って、岡田と一しょに上条を出た。午後四時過ぎであったかと思う。どこへ往こうと云う相談もせずに上条の格子戸を出たのだが、二人は門口から右へ曲った。

無縁坂を降り掛かる時、僕は「おい、いるぜ」と云って、肘で岡田を衝いた。

「何が」と口には云ったが、岡田は僕の詞の意味を解していたので、左側の格子戸のある家を見た。

家の前にはお玉が立っていた。お玉は寡れていても美しい女であった。しかし若い健康な美人の常として、粧映もした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう変っているか、わからなかったが、とにかくいつもとまるで違った美しさであった。女の顔が照り赫しているようなので、僕は一種の羞明さを感じた。

お玉の目はうっとりとしたように、岡田の顔に注がれていた。岡田は慌てたように帽を取って礼をして、無意識に足の運を早めた。(式拾式)

「夕食後に必ず散歩に出」るのが岡田の日課であったと冒頭の岡田紹介文にあるが、この日は夕食を食べずに「僕」と岡田は散歩に出たのであろう。「岡田は今夜己の部屋へ来て話そうと思っていたが、丁度己にさそわれたので、一しょに外へ出た。出てからは、食事をする時話そうと思っていたが…」とある。「食事をする時話そうと思っていたが」といい、後に蓮玉庵で蕎麦を食うところから判断すると、岡田も夕食を食べなかったのだろう。どちらにせよ、この様な規則正しい岡田の行動から、夕食前後の時間に岡田が自分の家の前を通ることをお玉は十分予測でき、その岡田を待ち受けていたのである。こうして考えてくると、このお玉の行動は(壺)の紹介文で上げられた岡田の特徴である日常の行動の規則正しさと相応じており、冒頭の岡田紹介文と物語の後半に現れるこの最後の盛り上がるの場面との照応が指摘できるのである。第四の特徴の照応が物語の中で重大な働きをしていることは言うまでもない。

第五の特徴は、「文学趣味がある」ことである。これは岡田が「僕」と知り合う仲立ちとなったという点で先ず意味があるが、照応とはいうには叙述上の距離が近すぎる。それよりも金瓶梅

に読み飽きて外へ出た岡田があゝ蛇退治の場面に遭遇する経緯を文学趣味との照応関係として挙げる方が適切だろうか。

一層重要な働きをもって岡田の文学趣味が顔を出す場面がこの後に用意されている。それはあゝの不忍池の場面である。

「あれまで石が届くか」と、石原が岡田の顔を見て云った。

「届くことは届くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答えた。

「遣って見給え」

岡田は躊躇した。「あれはもう寝るのだろう。石を投げ付けるのは可哀そうだ」

石原は笑った。「そう物の哀を知り過ぎては困るなあ。君が投げんと云うなら、僕が投げる」(式拾式) (下線前田)

「物の哀」が文学上の用語であることは説明するまでもないが、岡田の性向を指してこの用語がこのようにそれとは気付かれぬ程さりげなく雁の死を描く重要な場面で生かされている。このようなところにも鷗外の趣味を見ることができるとはではないか。しかも、この石原のいう「物の哀」⇒「文学趣味」から起こされた行為が物語の象徴的な意味を表す雁の死につながる場面で使われているというのも心憎い趣向である。それを思うと、この特徴もまた一つ重い役割を秘めて冒頭で語られているというべきではないか。

このように岡田を紹介する冒頭の文章は物語の後に出る岡田の行動と矛盾することがない。これは当然といえば当然のことかもしれないが、冒頭の岡田紹介文に現れる特徴の一つ一つが物語全体の中で無駄なく効果的に生かされていることやその照応のあり方が作為的でなくまことに自然である様などを見てくると、矢張り感嘆せずにはいられない。

この前後照応を前提として物語の読解をするならば、あゝの岡田を紹介する文は予告的であるとさえ言える。つまり、あゝの紹介文に岡田の将来が暗に語られているということである。そのよい例が、岡田の成績に関する「学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た」という箇所である。この叙述には既に物語の結末、即ち岡田が大学を途中で退き、ドイツに向かうという結末が予告されていたと読むことが出来よう。これは作者の側から見れば、「巧みな趣向」というべきであるが、その結末を知らぬ無心の読者の側からすれば、予告的である以上に予言的であると見ることさえ可能である。これが予言的であるとするならば、一見取り立てていうほどのこともない岡田紹介の叙述であっても、注意するとそこには更に踏み込んだ解釈を待ち望んでいる何かがあるように読めるのではないだろうか。先にも述べたことだが、これは我々が我々の人生を観察・反省する時の興味に似たものを感じさせる書き方である。

(3) 川上眉山への言及

このような読み方を許す理解に立つて読むと、次の文章はどのように見えてくるであろうか。

強いて求めれば、大分あの頃から後になって、僕は青年時代の川上眉山と心安くなった。あのとうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似ていた。尤も当時競漕の選手になっていた岡田は、体格でははるかに川上なんぞに優っていたのである。(老)

この岡田紹介文の中には「あのとうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた文士の川上である」という気になる一文がある。「悲惨の最期」というのは、(注5)「六月十五日早暁、剃刀にて頸動脈を切断し、自ら四十年の生涯を絶った。死因について、生活難といい、あるいは文学的行きづまりといい、また、秘していた結核の徴候があらわになったためともいわれた」を指しているものであろう。思えばこの岡田紹介文は紹介の文章としては常識を踏まないものである。というのも、「非業の死を遂げた故人を引き合いに出して友人を紹介する」ことは通常しないのではないかと思うからである。しかもこの紹介文では眉山の名を出すにとどまらず、更に「とうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた」として、その(注6)「悲惨の最期」という句を挿入する念の入れようである。このような場合筆にするのが躊躇われるようなことまで念入りに書き込んでいるのがこの箇所、重要な事柄をそれと気付かれぬほど幽かな筆致で描いてきた作者としては矢張り思うところあつてのことであつたのだと見たい。

川上眉山については、(注7)樋口一葉の日記に次のような文章がある。

かかるほどに、馬場君、平田ぬしつれ立て、川上眉山君を伴ひ来る。君にははじめて逢へる也。としは二十七とか。丈たかく、色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし。物いひて打笑む時、頬のほどさと赤うなるも、男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり。かねて高名なる作家ともおぼえず。心安げにおさなびたるさま、誠に親しみ安し。孤蝶子のうるはしきを秋の月にたとへば、眉山君は春の花なるべし。つよき所なく艶なるさま京の舞姫を見るやうにて、こゝなる柳橋あたりのうたひめにもたとへつべき孤蝶子のさまとはうらうへなり。

眉山が美男であつたことを裏付ける観察であるが、「男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり」という感想から、眉山は女性的で、共に美男であつたとはいえ、競漕の選手になっていた岡田とは対照的な外見であつたようである。

ここに気が付いたことを序でに書いておくと、「明治文学全集 20 川上眉山 巖谷小波集」の(注8)年譜(伊狩章編)には「予備門時代、白晳長身の眉山が黄八丈の羽織の袂をひるがえして通学するさまは注目の的だつたという」(明治十七年)という一行があるが、これは「雁」の次の描写を思い出させる。

三時が過ぎると、学生が三四人ずつの群れをなして通る。その度毎に、小雀の囀るような娘達の声が一際喧しくなる。それに促されてお玉もどんな人が通るか、覚えず気を付けて見ることもある。(中略)

この時お玉と顔を識り合ったのが岡田であった。お玉のためには岡田も只窓の外を通る学生の一人に過ぎない。しかし際立って立派な紅顔の美少年でありながら、己惚らしい、気障な態度がないのに、お玉は気が附いて、何とはなしに懐かしい人柄だと思ひ初めた。それから毎日窓から外を見ているにも、またあの人が通りはしないかと待つようになった。(拾陸)

このような「雁」の描写にあの眉山の姿があると言えは言い過ぎになるが、岡田と眉山との似通った姿を意識して「雁」を読むものには、「雁」の描写の中に眉山の姿を想像してしまうのも強ち不自然とはいえない。ここに美男子眉山を引き合いに出すわずかな理由があるとはいえ、それでも「非業の死」を遂げた人物を挙げて、友人を紹介するというのは、矢張り些か異常の感を否めない。

さて、この眉山を出して岡田を紹介する遠慮のない書き方には注意を惹かれるが、この一行を先に見た「前後の照応」という見方を加味して読むとどのような推測が成り立つか。いうまでもなく、「川上眉山は岡田の不幸な将来を暗に示すために布置された人物」とするのが自然な推測であろう。「永遠にという言葉に死のイメージが付きまとう」という(注9)指摘もある。) あるいは、「僕は今この物語を書いてしまつて、指を折つて数えてみると、もうその時から三十五年を経過している」という一文で始まる物語の最終場面において、「僕」とお玉との関係は「図らずも、お玉と(注10)相識になつて聞いたのである」として明らかにされるが、「岡田を主人公にしなくてはならぬ此話」(肆)とされる岡田がその後どうなったかについては一言も語られることがない。尤もここでいう「此話」は岡田の留学を以つて幕を下ろしたのであるから、岡田(それに末造)が物語が書かれた時点で登場しないからといって、それを不審がる必要はないのだろう。しかし、岡田同様物語の重要人物であつたお玉はそうではない。お玉は物語が終わつた後も物語の舞台に居残ろうとしている。それを思うと、岡田は留学という行為で体良く「雁」の舞台から排除され、お玉は物語成立に必要な語り手という立場を与えられて、舞台の隅に立ち留まつていたようである。(序でに言えば、その隣には「僕」が立っているという図を思い描くことができよう。) この作品の隠された執筆の動機と結びつくように思えるので、この人物の扱いは見過ごすことができない。

(4) 物語「雁」の成立とその内容

語り手によれば、「雁」という物語は「物語の一半は、親しく岡田に交つていて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、図らずもお玉と相識になつて聞いたのである」(貳拾肆)という。これは既に多くの論者が注目する箇所、確かに「雁」考察の重要な鍵である。この言葉が語り手「僕」から我々「雁」の読者に直接語られたものとする(それは、作者鷗外の

創作上の意図でもあった筈だが、) この言葉はどのように理解できるか。物語には成る程学生時代に語り手が直接経験した話、たとえば(壱)の「上條」の様子や岡田と交際を始めるに至った経緯など、また(貳拾貳)の不忍池の雁が登場する場面などが含まれているが、「窓の女の素性」(肆)はお玉から聞いた話を中心として、それに本人の直接的な見聞(小使時代の末造の話)が混じっているようである。ここで特に取り上げてみたいのは「他の一半は岡田が去った後に、凶らずもお玉と相識になって聞いた」話として、「僕」が我々読者に明かす話である。

先にも述べたように、内容から判断すると、確かに学生の「僕」の立場からだけでは知りえない知識がこの物語には含まれている。それが「岡田が去った後に、凶らずもお玉と相識になって聞いた」「他の一半」に当たると考えられる。それは、①お玉が結婚詐欺にかかった話と末造の妾になるまでの経緯であり、②松源でお玉父子が初めて末造に面会する場面であり、③魚金で梅が魚が買えなかった話であり、④末造の妾になってからお玉が父親を尋ねる場面であり、⑤お常が末造を問い詰める場面であり、⑥お常の parasol の話であり、⑦お玉がお貞から岡田の名を聞く場面であり、⑧末造が紅雀を買った経緯であり、⑨お玉の父親の無事な暮らしぶりを語る小話などである。他にもお玉自身の口からでなければ聞くことができない話もある。それは、⑩岡田に対して懐くお玉の内心の思いであり、⑪岡田に話しかけようとして果たせなかったお玉の最初で最後の企ての裏事情などである。このようにお玉は岡田に関する話もでき、末造が絡む話もできる位置にいる。更には、末造の口からお常のこと、子供たちのことなどその家庭内のことも聞くことができる立場にいるのである。

これらの話柄を眺めてみると、その殆どが時にはかなり立ち入った家庭内の話であったり、男女関係の話であったり、ということに気が付く。そして、その中には結婚詐欺にかかった話や松源でのお目見えの話などのように、さして親密でもない男性を相手には当事者であるお玉自身が気軽に話せることはできまいと思われる話題も含まれている。中でも「末造が来ていても、箱火鉢の中に置いて、向き合って話をしている間に、これが岡田さんだっただらと思う。…それから末造の自由になっていて、目を瞑って岡田のことを思うようになった…」(貳拾)という話などは「僕」との親密な間柄を容易に想像させる話題である。確かにこれは「僕」とお玉とは随分「親密な間柄」であったに違いないといった読者の想像を刺激せずにはおかない話である。この辺りの物語の文言は遠慮のない憶測を遮断するために置いた断り「僕にお玉の情人になる要約の備わっていぬことは論を須たぬ」を明らかに裏切っている。お常が末造を問い詰める場面(拾貳以下)を読むとこの気持ちは一層強められる。というのも、この話が「僕」の耳に入るには、先ず末造がこれをお玉に話さなければならない。次に、その話の内容を次にお玉が「僕」に話す。お玉はおとなしい性格の中にも勝った気象を感じさせる女性で、松源の場面でお玉が末造についてした観察の言葉(「色の浅黒い、鋭い目に愛敬のある末造が、上品な、目立たぬ好みの支度」云々)からも推測することができるように、小さいことにも観察を怠らぬたちであるらしい。当然お玉自身の細々とした観察も加えながらこれらの話をしたに違

いない。このような手順を経過しなければならない話を詳しく「僕」はお玉の口から聞くのであるが、それには時間もかかったことだろう。このように手の込んだ話をするお玉とそれに付き合って時間を惜しまない「僕」とが淡泊な関係に終始したと考えられるであろうか。少なくともある程度身を入れて相手の話を聞く興味を互いに持っていたということが考えられなければならない。「僕」は「なに、己がそんな卑劣な男なものか」（貳拾貳）という自尊心をもつ男性ではあるが、お玉に対する「僕」の男性としての興味がなければお玉の女性としての経歴を内容とするこのような会話は成立しないのではないか。しかも、この二人が交す話の中には「この晩にも物を言い合って興奮した跡の夫婦の中直りがあった」（拾肆）などという随分あからさまな文言までもが挟まれている。お玉はこの夫婦喧嘩の場面を「僕」に描き伝える時に、第三者を前にしてあからさまに語ることを憚られるこのような夫婦間の和解を示す一行を忘れずに付け加えている。どのような顔をして「おとなしい」お玉はこの一行を「僕」に伝えたのであろうか。この時の話し相手とはこのような話ができるまでに昵懇で遠慮のない仲、更にいえば「互いに身も心も許した仲」だったのではないか。もはや「僕にお玉の情人になる要約の備わっていぬことは論を須たぬ」という断り位では、そのような不躰な推測を遮断することができない位に立ち入った話をお玉は「僕」にしていると判断すべきである。お玉と「僕」とはある一線を越えた関係であったと考えなければならない。「僕」が作者の分身であるとも考えられるのであれば、「僕」とこのような関係にあるお玉はいったい何者なのか。

（5）「お玉」という名前

お玉の正体を推測する手掛かりはその名にある。鷗外の作中人物は、（注11）そのモデルが容易に推定できる命名の仕方になっている場合がある。

抑「お玉」という名は、鷗外にとっては（注12）特別の名前である。その裏付けとなるのが、「半日」である。言うまでもなく、これは「ある日の鷗外自身の家庭生活をユーモラスに写したもの」（竹盛天雄編森鷗外必携）であるが、ここに出てくる長女の名前が「玉ちゃん」である。子供に関して鷗外が如何に深切細心な心遣いを持つ父親であったかは、鷗外その人の書簡や子供たちの残した追憶の文章などが語るところである。小説中の長女の名付にも同様に細心深切であった筈で、「半日」の長女を「玉」と呼ぶのも必ずや十分な用意があつてのことであつた筈だ。

「玉」という名が鷗外に持つ意味を筆者は次のように推測する。「半日」の博士の娘の名は「玉」であるが、鷗外の長女は「茉莉」であるから、「玉」⇔「茉莉」という理解があることが分かる。「茉莉」の音「マリ」は「鞠」に通じる。「鞠」は「玉」であるから、ここから「玉⇔鞠⇔マリ⇔茉莉⇔お玉」という理解の流れを追うことができる。また、「鞠」と「玉」とのより直接的なつながりは「キタ・セクスアリス」の次の場面からも押さえることができる。

教場でむつかしい顔ばかりしていた某教授が相好を崩して笑っている。僕のすぐ脇の卒業生を掴まえて、一人の芸者が、「あなた私の名はボオルよ、忘れちゃあ嫌よ」と云っている。お玉とでも云うのであろう。（傍線前田）

ここから、「お玉」⇔「ボオル(ball)」という理解があることが分かる。「ボオル」とは「鞠」（マリ）のことで、これが「遊びやスポーツに用いる球。ゴム製のほか、革製、綿をしんにして糸で巻いたものなどがある。ボール。」（大辞林）であるのはいうまでもない。これらから、「お玉⇔ball⇔鞠⇔マリ」という理解の流れを追うことができる。どちらにせよ、「お玉」は「マリ」と呼ばれる人物がモデルになっていたことが推測できるが、この「マリ」は勿論鷗外の長女「茉莉」ではあるまい。鷗外の周辺で「マリ」と呼ばれる女性は存在するのであろうか。先にあげた六草氏の著書はあの「舞姫」のエリスと目され、帰国する鷗外を追って来航したエリーゼの名前を記した教会簿の洗礼記録の写真を載せている。（277ページ）それには「Elise Marie Caroline」という文字が記されている。つまり、エリーゼ・ヴィーゲルトのミドルネームがMarieである。ここから、次の様な流れを考えることができる。

「Marie」⇔「マリ」⇔「鞠」（⇔ボオル）⇔「玉」

あの「雁」のお玉は、エリーゼ・ヴィーゲルトの面影を強く持つ女性であり、「僕」が作者鷗外に擬せられるなら、作者がこの物語を書くに当って下敷きにした「お玉」と「僕」との心理的親近関係は留学時代に知り合ったエリーゼとの親密な関係を再現しようとしたものではないのであろうか。そう考えると、何かの意図が隠されているような次の文章にも納得が行く。

僕の胸の中では種々の感情が戦っていた。この感情には自分を岡田の地位に置きたいと云うことが根拠をなしている。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌っている。僕は心の内で、「なに、己がそんな卑劣な男なのか」と叫んで、それを打ち消そうとしている。そしてこの抑制が功を奏せぬのを、僕は憤っている。自分を岡田の地位に置きたいと云うのは、彼女の誘惑に身を任せたいと思うのではない。只岡田のように、あんな美しい女に慕われたら、さぞ愉快だろうと思うに過ぎない。そんなら慕われてどうするか、僕はそこに意志の自由を保留して置きたい。僕は岡田のように逃げはしない。僕は逢って話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢って話だけはする。そして彼女を妹の如くに愛する。彼女の力になって遣る。彼女を淤泥の中から救済する。僕の想像はこんな取留のない処に帰着してしまった。（式拾式）

ここにはお玉に対する「僕」の愛着が明確にやや唐突に書き留められている。その愛着は「この抑制が功を奏せぬ」というほど強いものである。岡田紹介文の川上眉山に岡田の暗い運命の暗示を読み取り、お玉と「僕」との親密な関係を考え、お玉の正体を考えてきた本稿にとって、岡田を押しつけてお玉に近づきたいという「僕」の「この感情には自分を岡田の地位に置きたいと云うことが根拠をなしている」という率直な言葉は尤もな声として響く。岸田美子氏が（注13）「お玉の蔭に、横浜の埠頭でエリスを見送る鷗外自身の心情を汲むやうにも思ふ」

として、「雁」の最後の場面「そして美しく睜つた目の底には、無限の残惜しさが含まれているようであった」に鷗外とエリーゼ・ヴィーゲルトの姿を想見しているのも首肯されるのである。このような親近感がなければ、裏店の飴売の老人とその娘の人生をここまで心を込めて描き出す動機を作者鷗外は持てなかったのではないか。山崎國紀氏は(注14)「エリーゼ体験は、鷗外文学の性格を、ある意味では規定しているといつてよい。(略)〈女の顔は石のやうに凝つてゐた。そして美しく睜つた目の底には、無限の残惜しさが含まれてゐるやうであつた。〉『普請中』に描かれた捨てられる白人女性の「凝り固まつたやうな微笑を顔に見せて、黙つてシャンパニエの杯を上げた女の手は、人には知れぬ程顫つてゐた」という表情と挙措に、お玉の表情がぴったりと一致するのである。鷗外の心の深層にあるエリーゼ残像の反映なのであるうか。」としている。本稿もまたお玉がエリーゼ・ヴィーゲルトの面影を強くもつ女性であるという推定に立つ。更に想像を膨らませて小説風に言えば、「雁」という舞台の上の「僕」を演じるのが仮面を被った森林太郎であつたやうに、お玉を演じるのは仮面を被ったエリーゼその人であつた、ということもできよう。

(6) 終わりに

今筆者は森林太郎とその若き日の恋人エリーゼとの非常に親密な二人だけの世界を「雁」という物語の舞台を借りて、創造しようとする内奥の欲求が、作家森鷗外に「雁」を書かせたのではなかったか、というようなことを考える。エリーゼと森林太郎二人の人生が切り結ぶ哀切な一コマに寄せる慈しみの混じつたこの欲求が遠い思い出を語る「雁」という物語を書く際の強い動機となって作家鷗外に働いていたことを筆者は思う。そのような動機がなければ、「雁」はあのように実感の籠もつた、読む者の心に残る物語とはならなかつたのではないか。

【注】鷗外の文章は岩波書店第三次「鷗外全集」による。但し、漢字及び仮名遣いは通行のものに改めた。その他の引用についても同様。

(注1) 六草いちか氏「鷗外の恋 舞姫エリスの真実」(2011年3月 講談社発行)

(注2) 「人間観察の面白さ」を感じさせる一例を挙げる。

末造が妙に笑つた。「どうせそんなのは、学校では出来ない学生なのですよ」こう云つて、心の中には自分の所へ、いつも来る学生共の事を考えている。(漆)

「妙に笑う」末造に鋭い注意を向けることができるような人間であつたなら、お玉父子はこの時既に末造の正体を見破る糸口を掴んでいたかも知れない。ここにはお玉父子がどんな人たちであつたかが、丁度我々が日々人々に接する時のやうに何の注釈もなくしかもはっきりと示されている。

(注3) 「半日」に「好い男は年を取ると損ねるから、おれのような醜男子のほうが得だ」とあ

る。また、「(際立って立派な紅顔の美少年であり)ながら」と微妙な表現を用いて、容貌に加えて、「己惚らしい、気障な態度がないのにお玉は気が附いて…」とお玉が岡田の内面を見ようとしていることに作者は注意している。

(注4) 日本近代文学大系 11 「森鷗外集 1」(昭和49年9月 角川書店発行)(202ページ)

(注5) 「明治文学全集 20 川上眉山 巖谷小波集」(昭和43年7月 筑摩書房発行)年譜

(注6) 酒井敏氏に「悲惨の最期」などというかなりどぎつい言葉が使われていることは、ここがこれから始まる物語の「主人公」について書かれている箇所だけに、眉山が美男子として通っていたという事情を考慮しても、いささか奇異な印象を受ける(竹盛天雄編森鷗外必携 平成元年10月 学燈社発行所収『雁』論—「雁という物語」と作品『雁』)という指摘がある。また、細谷博氏に「美男として知られる川上眉山を惹き、それが「悲惨の最期を遂げた」とまで言及されることも含めて、何とも意味ありげな〈紹介〉である」という指摘(「森鷗外研究8」平成11年11月 和泉書院発行)がある。

(注7) 水の上日記 明治二十八年五月二十六日

(注8) 伊狩章編。この文の出どころについては筆者未調査

(注9) 酒井敏氏『雁』論—「雁という物語」と作品『雁』(前掲竹盛天雄編森鷗外必携)

(注10) 男女が「相識」であるとはどういう意味を含むか。お玉と「僕」との関係を示唆するこの熟語にも注意すべきだ。

(注11) 「キタ・セクスアリス」の鰐口弦が谷口謙であるなどの例。

(注12) 岸田美子氏「森鷗外小論」(昭和22年6月 至文堂発行)に「お玉は気に入ってゐる方の名であつたに違ひない」(59ページ)とある。

(注13) 前掲書「森鷗外小論」(67ページ)

(注14) 「森鷗外を学ぶ」(1992年2月 世界思想社発行)(92ページ)